K-ABC と学校心理学，カウフマンから継いだもの：
石隈利紀へのインタビューから [1]

鈴木朋子 [2]・安齊順子 [3]

Passion for K-ABC and School Psychology; Legacy from Dr. Kaufman

Tomoko SUZUKI [1]
Junko ANZAI[2]

はじめに

知能検査は，心理学の歴史で重大な役割を果たしてきた。現在の知能検査の源流は，1905 年にビネ（Binet, A.;1857-1911）とシモン（Simon,T.;1873-1961）が発表した「異常児の知的水準を診断するための新しい方法」（Binet & Simon, 1905）が源流とされている。1939 年にウェクスラー（Wechsler, D.;1896-1981）が発表したウェクスラー式知能検査（Wechsler, 1939）は児童用（WISC），成人用（WAIS），幼児用（WPPSI）が作成され，現在も定期的に改訂されている。

教育的働きかけの方向性を知るために開発された知能検査に，Kaufman Assessment Battery for Children（K-ABC）がある。1983 年にカウフマン夫妻（Kaufman, A. S.[4];1944-，Kaufman, N. L.[5];1945-）が発表した K-ABC は，2004 年に KABC-II に改訂された（Kaufman & Kaufman, 1983; 2004）。日本では，1993 年に松原達哉・藤田和弘・前川久男・石隈利紀による「K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー」が丸善メイツから，2013 年には藤田和弘・石隈利紀・青山真二・服部環・熊谷恵子・小野純平の日本版 KABC-II 制作委員会による「日本版 KABC-II」が丸善から発売された。

知能検査開発者オーラルヒストリーを収集する中で（鈴木・鈴木・安齊，2016；鈴木，2018；鈴木・小泉，2019；鈴木・安齊，2020；Suzuki, 2021 他），「日本版 K-ABC」，「日本版

---

[1] 本研究は，科学研究費補助金(15K04117「発達検査デジタルアーカイブ」の構築，19K03336 心理検査開発者オーラルヒストリーによる日本心理検査史）の助成を受けた。
[2] 横浜国立大学教育学部准教授（Yokohama National University, College of Education）
[3] 法政大学現代福祉学部非常勤講師（Hosei University, Faculty of Social Policy and Administration）
[4] アラン・カウフマン は，1965 年ペンシルバニア大学を卒業，1970 年コロンビア大学のソーンダイクのもとで Ph,D.を取得。1970 年代よりウェクスラーのもとで WISC-R の改訂を行い，ジョージア大学准教授，アラバマ大学教授，エール大学教授。
[5] ネイディーン・カウフマンは，1978 年コロンビア大学で特別支援教育（神経科学）の Ed,D.を取得，アラバマ大学やエール大学医学部児童研究センターで教鞭をとった。

KABC-II」改訂の中核となった筑波大学名誉教授の石隈利紀にインタビューを行う機会を得た。石隈は，1950 年に山口県で出生。会社勤務・塾経営後，アラバマ州立ガヅデン短期大学(Gadsden State Junior College)を経て，1985 年アラバマ州立モンテバロー大学(University of Montevallo)心理学専攻卒業。同 1985 年アラバマ大学大学院修士課程(The University of Alabama, Collage of Education Educational Psychology major)入学，アラン・カウフマンに師事。1986 年，同大学院博士課程進学(School Psychology major)。1987 年～1988 年，日本心理適性研究所の客員研究員として日本版 K-ABC の出版準備を行う。1987 年冬，Dr. Albert Ellis の訪日の際の通訳。1989 年夏～1990 年，カルフォルニアサンディエゴ州立大学（San Diego State University）で故バレリー・クック・モラール，キャロル・ロビンソン・セニュアルトウに師事し，大学院カウンセラー養成学科講師，サンディエゴの小学校でスクールサイコロジスト・インターンを経験。1990 年同大学院博士課程修了，“A cross-cultural study of Japanese and American children's intelligence from a sequential-simultaneous perspective. University of Alabama. Ann Arbor, MI: University Microfilms International.”にて博士号(Ph.D.)取得。1990 年 9 月より筑波大学講師として保健管理センター学生相談室に勤務。以降，筑波大学人間学類・心理学類，大学院教育研究科・人間総合科学研究科にて助教授・教授，筑波大学副学長・理事，附属学校教育局教育長を歴任しつつ，附属病院保健衛生カウンセラー，心理発達教育相談室相談員，附属学校教育局指導教員として心理教育的援助サービス・カウンセリングの実践を行う。2016 年筑波大学定年退職，同名誉教授・特命教授。2016 年東京成徳大学応用心理学部教授。日本学校心理学会理事長，日本学校心理士会会長，日本 K-ABC アセスメント学会副理事長などを兼任。公認心理師の制度の立ち上げにかかわり，公認心理師カリキュラム等検討会委員，日本心理研修センター理事を務めた人物である。なお，1998 年出版「WISC-Ⅲ」，2011 年出版「WISC-Ⅳ」でも刊行委員として改訂を行った。

インタビューは，インタビュイーの確認を経た上で，石隈（2021）との重複部分は字数制限を考慮して省略した。人物名の敬称は論文の慣例に従って省いた。

石隈利紀へのインタビュー

インタビュー日程：2017 年 2 月 18 日

場所：筑波大学東京キャンパス大塚校舎にて

インタビュアー：鈴木朋子，小泉晋一，安齊順子

アメリカで心理学を学ぶ

安齊：どういうことで心理学を勉強するためアメリカに行かれたんでしたか。

石隈：アメリカに行く直前は，会社勤めと，塾経営や家庭教師をやっていて，将来自分の塾で食べていこうと思っていたので，アメリカは 1 年間ぐらい行って英語の勉強をして帰ろうと思っていたんです。

安齊：どうしてアラバマ州の大学に留学されたのでしょうか。

石隈：「英語を海外で学ぼう」（山田勝著　実業之日本社）の刺激を受けて，まず英語学校を考えました。アラバマ・ランゲージ・インスティチュート(Alabama language institute)が，治安もよさそうで，授業料もリーゾナブルだったので入りました。そのままそこのジュニアカレッジ

(Gadsden State Junior College)に入った。ジュニアカレッジを 1 年で卒業するときに，留学生アドバイザーからモンテバロー大学の奨学金があるけど受けてみないかって言われて。それでもっと勉強したいと思った。
安齊：どのような心理学の分野に入ったんでしょうか。
石隈：それが，私は塾で働いていたのもあり，教育心理学をやりたいって希望を書いたんですよ。そしたら教育心理学は，教育学部の中に副専攻としてはあるんだけど，専攻としてはないので，心理学のメジャー（主専攻）でどうかとなって。でもこれがよかったんですよ。心理学をひと通り勉強できたっていうか。

アメリカの心理学部は，教育心理学と実験心理学を日本ほど分けてないんですよ。大学院に行くと分けますけど。だから心理学，実験心理学，異常心理学から教育心理学から，心理統計から，いろいろ幅広く。しかも小さな大学だったので，教職員の方々と学生の距離が近くすごくサポートしてもらいましたね。アメリカにある文理学部というか，カレッジ・オブ・アーツアンドサイエンスのサイコロジーメジャー。だから私の学士号は，B.S.，Bachelor of Science なんですよ。大学院の修士は M.A.で，Master of Arts なんですけど。

K-ABC との出会い

石隈：大学で，学部のときにアセスメントの授業(Psychological Testing)というのがあったんです。これはミセス・ロジャース(Mrs. Juria Rogers)っていう先生が教えていらっしゃいました。この中に，カウフマン夫妻の K-ABC という検査が出て来ました。K-ABC は 1983 年にできた検査で，それをテキストの本[6]はちゃんと引用して書いていて。K-ABC って面白いな，カウフマン先生の大学院で勉強できたらいいなと，ふと思ったんです。

授業の担当のロジャース先生は，大学で教員しながらアラバマ大学に博士号を取りに行かれてたんです。カウフマン先生のこともよくご存じで，「私紹介してあげるわよ」って言われて，私はモンテバロー大学在学中にアラバマ大学のカウフマン先生を訪ねたんです。伝統のある立派な大学で，古い建物の中でカウフマン先生とお会いして。すごく偉い先生ですけど気さくな方で。K-ABC に関心があるんですって言ったら，日本版があるといいよねみたいな話をして，私のことも，まだ大学生なのに一研究者として扱ってくださって。

そのときすぐ大学院に行こうと決めたわけではないんです。アメリカの大学院は，大体 4 月に行くところが決まっているんです。GRE(Graduate record examination)というアメリカの大学院入学の共通テストがあって。分析能力(analytical ability)，言語能力(verbal ability)，数量的な能力(quantitative ability)の，当時は 3 つに分かれていました。500 が平均なんですけど，この大学院だったら 550 は必要とかあるんですよ。私は大学院に行くかどうかは別として受けてたんです，学部時代に。まあまあの成績だったので，大学院に行きたいなと思って，アラバマ大学とかイリノイ大学とか見たんですが，やっぱりカウフマン先生のアラバマ大学行きたいなと思って，夏休みに決心しました。でも遅いんです。もう願書は締め切ってるんです。
鈴木：書類の提出が間に合わないのでしょうか。

---

[6] Elliot A. Weiner, Barbara J. Stewart, 1984, Assessing Individuals: Psychological and Educational Tests and Measurements. Little, Brown

石隈：そう。夏休みに，たまたまロジャース先生ご夫妻(Dr. James Rogers & Mrs. Juria Rogers)が町の外に旅行に行かれてたんです。旅行するときに，よく向こうの人はハウスシッター(家の留守番)を頼むんです。治安が悪いから。私は，当時結婚していて，そのハウスシッターを頼まれたんです。その途中でやっぱりアラバマ大学院に行きたいなと思って，アラバマ大学のアドミッションオフィスに行ったんですよ。そこでインターナショナルスチューデント入学担当事務の方と話しました。アメリカのすごいところは，現場の担当者に裁量があるんですよ。「大学院で勉強したいという熱い思いの留学生が来ている。でも 4 月に願書を出してなくて，もう締め切ってる」という状況です。担当者が「分かった」と言ってくれた。「学部長とカウフマン先生に連絡するから」と，その場で連絡してくれて，カウフマン先生は，「彼には 1 回会ったことがある。ぜひアプリケーション出させてくれ」って言って。で，学部長も OK って。

「あなた GRE は受けているね。じゃそれ持っておいで」と。「大学の教授のレコメンデーションが 2 通いるよ。」と，その書類を数日で日にち切られて。そこで，私がハウスシッターしているのは心理学者の教授夫妻，つまり 2 人です。しかも私のことをよく知っていて，リコメンデーション書ける人です。ロジャーズ先生たちが帰って来て「お帰りなさい。実はこうで」と。「ああ，大学院に行く気になったか。うれしい」と，その場で書いてもらって。提出して，8 月の終わりから大学院生活です。

カウフマンのもとで学ぶ

安齊：では，1983 年の K-ABC テストができて，割とすぐにカウフマンに師事された。

石隈：すぐですよね。1985 年に大学院に入って，修士は 86 年修了なので。85 年秋学期最初に，カウフマン先生の“Individual Intelligence Test and Case Report Writing”の授業を受けて。当時，K-ABC の著者の 2 人の TT だったんですよ。最初の 1 年は 1985 年の秋の学期から入って 1986 年の秋の学期で修了するんですけど，修士課程は 30 単位取れば修了できて，私は修士論文を書かないコースでした。教育心理学専攻で，発達心理学とかも勉強しました。

次が，学校心理学との出合いです。博士課程ではスクールサイコロジーというプログラムがあるらしいと。そこではカウンセリングも学ぶし，アセスメントをもっと深めなきゃいけないし，学校のコンサルテーションも学ぶ，そういう実践的なスクールサイコロジストっていう一つの大きな職業のための訓練がある。私はスクールサイコロジストになりたいなと思ったので，博士課程はアラバマ大学で，教育心理学ではなくてスクールサイコロジストのプログラムに入って，実際に子どものテストとか，カウンセリングとか，そういうトレーニングも受けながら，小学校に行って相談でも実習をやりましたね。

安齊：それは日本でいう大学院の博士後期課程にあたるところでしょうか。それがスクールサイコロジーコースだったんでしょうか。

石隈：博士後期課程でスクールサイコロジスト養成プログラムですね。アメリカのサイコロジスト養成は博士課程（前期・後期で）5 年間があります。アメリカの後期課程の魅力は，後期課程でも授業がたくさんあるんですよ。実習のトレーニングもたくさんあるけど，授業もたくさんあるから，とにかくいっぱい勉強するしかないし，知識も技能も広がるんですよ。だから博士課程 5 年が終わったときには，スクールサイコロジープログラムですけど，関連領域はかなり論文読んだり勉強したりしましたね。生理心理学の授業も受けたし，臨床心理学はもちろん受けたし，

教育哲学みたいな授業も。難しかったですけどね。

だから修士と博士の違いは，論文書いたかどうかの違いだけではなくて，一般論ですけども，アメリカの場合にはその専門に関してよく勉強している度合いが違うんです。私は修士と博士後期合わせて 139 単位取りましたね。座学，演習，実習で。

安齊：先生は修士でカウフマン先生に習われて，それからスクールサイコロジーを学ばれたんですね。

石隈：スクールサイコロジーを目指して，博士も指導教員はずっとカウフマン先生です。最初 1985 年の秋学期は授業料を払いましたけど，1986 年の春学期からは，リサーチアシスタントかティーチングアシスタントをさせてもらったので，経験の上でも経済的にも助かりました。アメリカのリサーチアシスタントやティーチングアシスタントは，当時は基本週 20 時間勤務（月から金曜日 5 日、1 日 4 時間）なんですよ。20 時間が勤務で，20 時間は大学院生として授業，実習，論文です。リサーチアシスタントは先生の研究のお手伝いで，ティーチングアシスタントは大学院の授業助手か学部の授業担当です。それで stipend（報給）といって，給料が出るんです。当時，400 ドルから 600 ドルだから 6 万から 8 万ぐらいですから，ぎりぎり食べれるぐらいの給料です。

アメリカの州立大学は州の税金で運営されるので，授業料は，州内の人は安いのですが，州の外から来てる人は，私立大学並みとは言わないけど高いんですよ。だから留学生は州外の授業料ですから，州立大学でも結構お金がかかるんですよ。この授業料がリサーチアシスタントとかティーチングアシスタントを 20 時間やると無料になります。かつ stipend 給料が出る。しかも教授のそばで研究したり働いたりするので，個人的にも接触度は高いですよね。これもアメリカのいいところを，私はフルに活用しました。

仕事は月曜から金曜ですけど，その時間だけ働くっていうことはないので，頼まれたら土曜日とかも行って仕事するじゃないですか。土曜日に行くと，アジア系の留学生がよく来て働いていますよね。それから大学でも若い先生方が来て一生懸命研究していて，いい雰囲気でしたね。いろいろ刺激がありましたね。

K-ABC 日本版標準化

石隈：1986 年冬に修士を修了して，1987 年 1 月から 1990 年の 5 月までの 3 年 5 カ月が大学院博士課程です。1987 年の最初はアラバマですけど，その夏から 1988 年の夏までが日本なんですよ。日本では日本版 K-ABC を出す話が進んで，カウフマン先生が，石隈というのが今私のところにいるから，石隈を中心に日本版 K-ABC を出したらどうかというのを，当時の日本文化科学社茂木茂八[7]会長に推薦状を書いてくれて帰国が実現しました[8]。日本文化科学社の中に，当時は日本心理適性研究所[9]というのがあって，長く肥田野直先生も所長をされていましたけど，私は

---

[7] 茂木茂八(1910-1989)，1932 年東京高等師範学校付設第一臨時教員養成所卒。1948 年日本文化科学社の設立に参画。後に日本心理適性研究所所長，日本文化科学社社長・会長。（大泉，2003）

[8] James C. Kaufman(Ed.) 2009 Intelligent testing: integrating Psychological Theory and Clinical Practice, Cambridge University Press。

[9] 日本文化科学社は 1948 年に日本教材研究所として設立された心理検査出版社。1965 年，日本

そこの客員研究員という立場で給料をいただいて，日本版 K-ABC の標準化の準備をしたんです。そのときに日本版 K-ABC の日本版著者松原達哉先生，藤田和弘先生，前川久男先生とお会いしたんです。また ITPA の研修会で上野一彦にもお会いしました。

1987 年，1988 年は，私は日本版 K-ABC 開発の準備をしながら，日本の子どもたちのデータを取りました。それが，日本とアメリカの子どもの K-ABC のデータの比較というのが私の博士論文だったんです。千葉大学がアラバマ大学と姉妹校だったので，特別支援教育の梅谷忠勇先生の大学院の演習の授業を受けて，アラバマ大学の卒業単位に使うことができました。

安齊：日本文化科学社におられたときに，松原先生と知り合われたんでしょうか。

石隈：そうですね。松原先生とはこのとき知り合いましたね。日本文化科学社を通して。

アルバート・エリスとの出会い

石隈：1987 年の冬に，アルバート・エリス博士が日本に来るんです。東洋大学で日本カウンセリング学会があったときに，国分先生の折衷主義という研修を受けたんですけど，私の目の前にいる方が益満孝一先生で，その方が私を国分先生に会わせてくださったのです。国分先生は，その年の冬にアルバート・エリス博士が日本に来るので，通訳を探していらっしゃったんですね。国分先生が，「石隈さん，アメリカで勉強しているそうだけど英語はできるかね」と聞かれて。今だったら，「どの程度できたらいいんでしょうか」とか，ワンクッション置きますけど，もう当時はずっとアメリカにいてアメリカンでしたので，「Yes, I can!」と，躊躇はないですよね。アルバート・エリスっていう人が来るんだけど通訳やりませんかって，もちろん「I will!」ですよね。だけど私は正直に言いました。カウンセリングとかの本格的な勉強はアメリカでやったので，カウンセリングの英語はよく分かるけど，日本でどう訳されているかは分からないと言いました。そうしたら国分先生が翻訳された本をすぐに送ってくださったので，日本語も勉強して準備しました。当時の国分先生の有名なエピソードなんですけど，私に頼んだのはいいけど本当に石隈は英語ができるのかどうか不安でいっぱいだったと。そうしたら奥様の國分久子先生が，「頼んだんだからいいじゃない」と言われたそうで。私は東京のアパートに住んでいたんですけど，国分先生からお電話いただいて。もう恐縮しますよね，そうしたら，電話で，途中から急に英語になるんですよ。私の英語力を試されたんじゃないですかね。

それは 1987 年 12 月 6 日，寒い日でした。アルバート・エリス博士は成田空港に降りました。その日，エリス博士の宿泊先である国際文化会館で行った歓迎会でのことです。当時日本学生相談学会理事長であり，日本カウンセリング学会理事長であった中村弘道先生のご挨拶が「太平洋をはるばる渡って，わざわざ日本に来てくださってありがとうございます」でした。それを私が，「Dr. Albert Ellis, thank you for coming to Japan over the pacific ocean.」と通訳したら，国分先生が「よかった，彼は英語できる」と思って安心されたというのが，国分先生がよく出されるエピソードです。

安齊：うかがったことがあると思います。

石隈：アルバート・エリス先生とはすごく親しくなりました。通訳をすると講師は全面的に通訳に任せるわけなので，すごく心理的に距離が近づくんですよね。1990 年 9 月から筑波大学（着

心理適性研究所設立。2007 年同研究所をテスト編集部に名称変更（日本文化科学社，2021）。

任）なので，帰る前の夏に，国分先生からも勧められて勧められてエリス先生のところに 1 週間行って論理療法のスーパービジョンを受けて来ました。
安齊：すごいですね。すごく心理学に好かれているんですね。
石隈：そう。アラン・カウフマンという，知能検査，学校心理学では教科書に出て来る人で，知らない人はいない人。アルバート・エリスはカウンセリングの世界で知らない人はいないし。2 人のスーパービジョン受けたっていうのは，本当偶然ですね。

カウフマンとの研究

石隈：博士後期の単位を 1988 年から 1989 年の 1 年間にたくさん取りました。学部時代は心理学が面白くてしょうがなかったのですが，大学院時代はやっぱり時間との戦いだし，カウフマン先生に頼まれた仕事をやるのも高いレベルが求められるわけなので，すごくストレスフルでしたよね。

今だったら，インターネットで文献が見れるんですが，1987 年の最初のリサーチアシスタントの仕事は，カウフマンが大人・青年の知能の本を 1990 年頃出したんですけど，その資料作りの仕事でした。彼は WAIS とか知能検査に関する論文をチェックして，雑誌で論文タイトルのところにパーッと丸を付けて，段ボール箱にいっぱい入れているわけですよ。例えば大人の知能に関しては 2 箱ぐらい。それを私にくれて，丸を付けているからコピーしてくれと。キーワード 10 個ぐらいくれたんですよ。”development of intelligence”とか，”psychological testing”とか，”development of adolescence”とか。私は 10 個を見てコピーを取りながら分類するじゃないですか。だんだん面白くなって，この分類はこう分けたほうがいいんじゃないかとか。20 とか 30 とか分類を分けて整理して，ファイルして渡したら，カウフマン先生はすごく喜んで，面白いと。コピーをする前には，大学院生でお金がないから，あなたは 2 部コピー取っていいよと，1 部あげるから自分の勉強しなさいと。カウフマン先生はユダヤ系の人なんですけど，やっぱりユダヤ系の人でアメリカで成功してる人のタイプで，勤勉ですよね。だから私も，韓国から来た人も，勤勉な留学生をすごくかわいがってくれましたね。それで彼の信頼も勝ち得ました。

私が幸運だったのは，1988 年ぐらいから 1990 年までに，カウフマン先生は日本の知能にも関心があったので，大体この 3 年でカウフマン先生と共著の論文[10]を 3 本ですけど，出しましたね。カウフマン先生のいいところは，日本の留学生の私を資料集めだけで終わらせなくて，日本の知能に興味があるから，私と一緒に研究して共著で出してくれるんです。自分がリーダーシップを

---

[10] Ishikuma, T, Moon, S., & Kaufman, A. S. 1988 Sequential-simultaneous analysis of Japanese children's performance on the Japanese McCarthy Scales. *Perceptual and Motor Skills*, **66**, 355-362.
Moon, S., Ishikuma, T., & Kaufman, A. S. 1987 Joint factor analysis of the K-ABC and McCarthy Scales. *Perceptual and Motor Skills,* **65**, 699-704.
Kaufman, A. S, McLean, J.E., Ishikuma, T., & Moon, S. 1989 Integration of the literature on the intelligence of Japanese children and analysis of the data from a sequential and simultaneous model. *School Psychology International*, **10**, 173-183.
後に，Kaufman, A. S., Ishikuma, T., & Kaufman-Packer, J. 1991 Amazingly short forms of the WAIS-R. *Journal of Psychoeducational Assessment*, **9**, 4-15.
Kaufman, A.S., Ishikuma, T. & Kaufman, N.L. 1994 A Horn analysis of the factors measured by the WAIS-R, Kaufman Adolescent and Adult Intelligence Test (KAIT), and two new brief cognitive measures for normal adolescents and adults. *Assessment*, **1**, 353-366.

とるけど，一緒に研究した人もチームメンバーとしてオーサーシップを与える。もう本当にシンプルで，汗流した人が著者になるべきだという考え方。

カウフマンの人柄

鈴木：カウフマン先生はどんなお人柄，どのような性格の方だったんでしょう。

石隈：丁寧です。パッションがあって，丁寧で，粘着で，粘り強くて，負けず嫌いで，頑固で。でも新しいこととか異文化に対してはすごくリスペクトするし，自分を押し付けないし，権威・権力は恐れないですよね。

彼は 1983 年に K-ABC を出したんですけど，5 年ぐらい前に出版社から新しい知能検査を出す話が来たわけです。当時彼は 38 歳です。しかもアメリカではウェクスラー検査とビネー検査という，両横綱の検査がありました。そんなのにチャレンジする人は誰もいないですよね。カウフマンは，ウェクスラーの WISC が WISC-R に改訂されるときの，標準化のリーダーだったんです。標準化のアイテムを考えたり，フィールド調査をやったり。K-ABC は American Guidance Service という会社ですが，そこから頼まれて 5 年で新しい検査を作るんです。

カウフマンという若手の優秀な人に検査を頼むっていうのは，会社にとっては財産を託すことです。検査の開発は，お金がかかるじゃないですか，標準化したりして。それを 38 歳のご夫妻に託したっていうのは，すごいことです。カウフマン夫妻がそれを受けて K-ABC を 1983 年に出して，世界的にかなり使われる検査になったというのもすごい。だから彼の性格としてはチャレンジ精神が強くあると思います。本当に研究熱心だし，チャレンジ精神がある。だからプロとしての誇りというか，仕事には厳しい。自分の弟子とかに指導するときも非常に厳しい。だけど援助する子どもや保護者に対しては，すごくリスペクトしますし，優しいですよね。

カウフマンが K-ABC を開発した理由

鈴木：カウフマン先生が K-ABC と開発しようと思われたのは，何ででしょうか。

石隈：彼がよく言うのは，3 つ理由があって，1 つは，これはアメリカの事情なんですけど，いわゆるアングロサクソンの白人の子は検査で力が出せるけれども，黒人とかヒスパニックの子どもには不利じゃないかっていわれてたんです。実際，当時の WISC-R でいわゆる白人の子どもの IQ の平均点と，黒人の子どもの平均点は 1SD，15 ぐらいあったんです。これはおかしいだろう，あまりにも白人文化に偏ってるんじゃないかという問題意識があった。ビネーはもともと言語性の問題が多いですから。人種によってマイノリティーが損をしていると。実際，当時の WISC-R で IQ の差が平均 15 あったのが，K-ABC では 7 とか半分ぐらいになった。要するに文化的な度合をかなり減らしたというのが彼の K-ABC を作った 1 つ目の理由ですね。

２つ目は言語に絡むんですけど，例えば LD の子どもが WISC 受けますよね。そうすると単語とか知識とか出てきますよね。読み書きが苦手な子だったらできないですよね。だからカウフマンは，そういう習得度というか，言語とか算数とか国語とかと，もっと問題解決的な言語や文化の負荷が少ないものとを分けようと。いわゆる問題解決型の検査と，学んだ結果としての習得度を分けようとした。

3 つ目は，神経心理学はすごく進歩が速い。だけど K-ABC の前の検査，ウェクスラーもビネーもそうなんですけど，そういう理論ベースに作られた検査がないというのがカウフマンの考え

で，ルリアの神経心理学の理論を基に検査を作ったのです。KABC-II も理論に基づいています。WISC-Ⅳはウェクスラーの臨床実践に基づいて作成された検査の改訂版ですが，知能の理論を取り入れていますし，今は CHC 理論という理論に基づいて解釈します。ただ WISC を最初に作るときに理論に基づいて作ったわけじゃないというのがカウフマンの考えです。これが，3 つ目の理由ですね。

ここでお伝えしたいのは，カウフマン先生は WISC をきわめて高く評価していて，K-ABC を作った後も，WISC はとても優れた検査だと認めています。93 年に日本版の K-ABC が出た後，私は日本文化科学社から WISC-Ⅲの日本版の開発者になるお誘いを受けて，その後日本版 WISC-Ⅳの開発に関わりました。私はカウフマンの思いを継いでるので，何か日産の車を作ってる人が，トヨタの車頼まれて作るのって何だかなと思って。国際電話したんですよ，カウフマンに。そしたら「ウェクスラー検査は世界を代表する素晴らしい知能検査です。その日本版作成に関われるのは名誉です。ぜひ受けなさい」と言われて，WISC-Ⅲの開発に携わって，WISC-Ⅲ，WISC-Ⅳと，今に至るのです。カウフマンは，いいものはいいと認めます。

話が飛びましたけど，カウフマンが K-ABC を作ったのはそういう理由です。とにかく子どものために役立つものを作りたいと。役立たないものはやる必要がないという。検査を出して，IQ を出して，障害名をつけるだけの検査ならやる意味がないと。それが彼の思いですね。

サンディエゴでの学校心理学インターン

石隈：1989 年から 90 年はサンディエゴにいまして。サンディエゴへ行った理由は 1 つです。カウフマンご夫妻がサンディエゴに住んでるから。カウフマンはご夫妻でサンディエゴに引っ越して，California School of Professional Psychology という大学院大学にアラバマ大学から移られた。私のドクターコースの最後の 1 年がインターンなんですが，それを私はサンディエゴでやりたいと思いました。。1年間フルタイムで，学校や教育機関などに勤めてスクールサイコロジーのインターンをやるんですよ。インターンが Ph.D.を取るための必須条件だし，現場で働きたいので，第 1 希望はサンディエゴにしました。

これも本当に「アメリカらしい」というか，奇遇なんですけど，サンディエゴ州立大学の学校心理学の分野で，アカデミック・インターンを募集していました。ドクターコースの最後の 1 年間の大学院生を，アカデミック・インターンとして雇うのです。2 日半は講師として雇って授業をやらせて，その授業に対してスーパービジョンを教授がやる。残りの 2 日半は現地で小学校，中学校，高校で実践のインターンをしっかりやると。スクールサイコロジーの場合，インターンは学校現場が半分で，半分が学校心理学に関係した研究機関で OK というルールがありました。私はハーフタイムが主に小学校。一応中・高も経験しなきゃいけないというので少し行きましたけども。ハーフタイムがサンディエゴ州立大学の講師として，大学院で「学校心理学入門」と「アセスメント」を教えさせてもらいました。

そのときのサンディエゴの先生が，何でアカデミック・インターンを作ったかというと，いわゆるアングロサクソンじゃない，異文化をもつスクールサイコロジストを育てたいからです。異文化が分かるスクールサイコロジストを育てるには，アングロサクソンではない人々，アフリカ系アメリカ人とか，ヒスパニック系とか，ネイティブアメリカンとか，アジア系の人とか，そういう人にスクールサイコロジストを育てる大学の教員になってほしい。つまり多文化，マルチカ

ルチャーが分かるスクールサイコロジーのトレーナーを育てるために，1 年間のインターンのうちの半分で大学の教員になるためのトレーニングをやるのです。バレリー・クックという先生とキャロル・ロビンソン，お 2 人の先生です。バレリー・クックは何億っていうグラントを，多文化の人，ネイティブアメリカンの大学院生がスクールサイコロジストになる応援とか，ヒスパニック系の大学院生の応援とかっていうことをやるために獲得した人なんですよ。彼女が書いたグラントのおかげで，そのアカデミック・インターンというポストがあって，志願したら書類審査にパスして，インタビューに行きました。幸運にそのポストに通って，サンディエゴで現地のインターンをするところをいくつか紹介してもらいました。いくつかの学校区のインタビューを受けて，裕福な学校区で給料がよく臨床のスキルを訓練してくれるところと，ヒスパニック系の子どもがたくさんいるところで給料は出るがぎりぎりの生活程度の学校区の二つで合格をもらいました。私は多文化の学校心理学に関心があったので，後者の学校区を躊躇無く選び，そこで良質のトレーニングを受けました。

だから最後の 1 年は 2 日半大学で教えて，2 日半小学校でスクールサイコロジストのインターンやって，夜，ドクター論文の仕上げをやってた。夜，博士論文を書いて，早朝カウフマン先生のポストに論文の原稿を入れて，そうしたらカウフマンが赤を入れてくれる。私が帰りにポストでそれを拾って，また次の朝原稿を入れる。大丈夫な時間だったらノックして，教えてもらうとかっていうのをやっていましたね。この 1 年，かなり密度の濃い日々でした。

RTI と知能検査

石隈：1989 年からスクールサイコロジスト・インターンとして，WISC とか K-ABC を実施するのは重要な仕事の一部でした。子どものアセスメントをやって，IEP，つまり individualized education program をチームで作成します。障害のある全ての子どもは IEP をもって，これによって教育を受けますので。発達障害の可能性のある子どもに知能検査をするというのが必須だったんです。知能検査は, IEP を準備する 1 つの手段としてとらえられています。今は，RTI, response to intervention あるいは response to instruction です。これが知能検査の歴史に大いなる影響を与えるわけです。

アメリカはずっと知能検査については，賛否両論ですよね。特にアフリカ系アメリカ人とかマイノリティーにとって差別じゃないかと。実際，統計上も，いわゆる特別支援学級に入るのは，人口比率から比べるとアフリカ系が多いといわれてました。カウフマンの K-ABC はそれに対しての一つのアクションですよね。アフリカ系にとっても不利益が少ない検査を作ったっていう。もう一つのアクションは，RTI，検査で子どもを測るのは限界があると。LD と判断される人がアメリカでは多いんですけど，LD の判断にはいろいろな批判があります。個別知能検査の結果，IQ と個別学力検査の結果，学力とのディスクレパンシーが標準偏差で 1.5 あるとか，この差が大きいと LD だという定義がアメリカでは一般的だったんです。だから，読み書き算数の力と知能の検査のギャップがあると LD という判断があって。反対を唱える人がいて。RTI は，その子どもにとにかく丁寧に教えてみて，それで分からなかったら初めて LD かもしれないので，まずみんなに教えてみる。それでもだめだったら少人数で，グループで取り出して教えてみる。それでもだめだったら個別の心理検査をやるなり，個別ということです。これはティア 1，ティア 2，ティア 3 という 3 つのステップからなります。日本の学校心理学の三段階の心理教育的援助サー

ビスと似ています。しかもティア 3 でも，知能検査がなくても LD が判断できる選択肢がアメリカの法律で認められたのです。だからアメリカの法律では知能検査を使ってもいいし，使わなくてもいい。そういうわけでアンチ知能検査のムーブメントは，今アメリカでは強くあります。本質は，知能検査の是非ではなく使い方の問題だと私は思っています。

私も RTI の考え方になってもびくともしないというのは，検査だけで子どもの知的発達を測る考えは，カウフマン先生にも私にもないからです。授業中の様子とか，ほかの成績とか，観察と検査と引き継ぎ文書，保護者面談，教員との面談をやって，この子は知的な発達は発達年齢相当ぐらいでも，縦次処理は強い，同時処理は弱いって特徴があるよねとか，学習意欲はこうだよねっていう，トータルの中で検査使いますから。

アメリカはスクールサイコロジストが観察しても全然目立たない。なぜかというと，アメリカはよくお母さんとお父さんが授業のアシスタントにボランティアで来られていて，テストの丸付けとかしてるんですよ。あと教育実習の人が，結構長くいるんです。だから教室の中に大人が 1 人じゃないことが多いのです。私が教室に行って観察してても，そんなに目立たない。親が来ることを子どもはよく見てるので，子どもは私に「誰のパパ」って聞くんですよ。「nobody's papa」と言うんですけど。「I'm here to help you」じゃなくて，「help everybody」って言って仕事を紹介してました。「I work here for the school, I'm here to help everybody. Can I help you something？」と言ったら，「OK.」とかそんな感じで子どもと話をしてる。

知能検査開発の工程の険しさ

石隈：心理検査は，たかがツール，されどツールなので，使う人によって違うよねっていうのが私の考えだし，カウフマンの考えです。だからツールだけで議論してもしょうがないし，上手に使えばいいのです。でも使う意味のある，いいツールを標準化して作るためには，やっぱりすごい時間がかかる。K-ABC の日本版を作りましたが，翻訳ではなくて日本の子どものためのものを作るので，日本版 K-ABC で 5 年ぐらいかかりましたし，WISC のテストでも大体 3 プラスアルファ，5 年ぐらいかけますよね。検査の翻訳，日本版開発でまずパイロットスタディとして項目を試しにやってみたり，研究したりするので 1 年かかるんです。次はできた検査を全国でやる予備調査，これが 1 年ぐらい。理想的にいって 3 年目に標準化のためのデータを取る。標準化のためのデータを取るためには，テスターのレベルが一定以上なきゃいけないので，テスターの研修会をやりながら，標準化のデータを取る。これが 3 年目，4 年目。後で検査結果全体を見て，評価点や偏差値などに粗点を変換する表を作ったりして，手引書を作るので，まあ 5 年ですよね。大体 5 年ぐらいかかる，とっても大変な仕事です。私の心配は，標準化検査開発の「尺度」づくりをやれる人が日本では少ないんですね。最新の知能検査では大六先生と服部先生です。

鈴木：服部先生はお話をうかがって，統計処理をする，テストのマニュアルに掲載する数値を出す大変さをうかがいました。

石隈：大六先生が WPPSI-III，WAIS-IV の，服部先生が KABC-II のものさしを作ったリーダーです。大六先生とか服部先生みたいな人に，どんどんつないでいかないと検査が開発できません。その前，WISC-III，WISC-IV，WAIS-R，WAIS-III，K-ABC のときは，前川久男先生が尺度作りの中心だったんです。私も検査はもちろん分かるし，検査の結果の解釈もできるんですけど，統計はプロじゃないので，そういう統計のプロがいないと回らない。学校心理学・特別支援教育，

心理検査が分かり，かつ心理学統計に強い人を育てていかなきゃいけないなと思います。

K-ABC 日本版独自の項目について

鈴木：石隈先生はウェクスラーと K-ABC の両方に関わっていらっしゃるから，違いも感じてらっしゃるかと思うのですが，他の開発者からのお話では，ウェクスラーは，アメリカの出版社の力が強く新しい問題を提案するのに苦労されてる印象があります。K-ABC 側は，先生がカウフマンと直接話すことが出来るせいか，日本人はこの問題がよくできるので難しい問題を作ったという検査が結構あり，驚きました。新しい問題は柔軟に追加できるのでしょうか。

石隈：K-ABC とウェクスラーを比べると，K-ABC の方が検査開発は柔軟でした。だけど KABC-II は，途中からアメリカの Guidance Service が Pearson の傘下に入って厳しくなりました。でも先生がおっしゃるように，私はカウフマン先生と直通でやりとりできるので，K-ABC の場合も，KABC-II でも，柔軟性が結構ありましたね。KABC-II の開発の途中，2011 年カウフマン先生が日本ＬＤ学会の大会の講演で日本に来てくれたときに，いろいろ助言もしてもらいました。かなり大胆な修正が KABC-II ではできました。削除している問題もあるし，一番大胆なのは，日本版 KABC-II の解釈。これはルリア理論に基づくカウフマンモデルと CHC モデルということで，カウフマンモデルで継次処理という尺度だったら，CHC では短期記憶という尺度に読み替えていくんです。KABC-II の絵の統合という下位尺度は，カウフマンモデルでは同時処理なんです。同時処理は CHC では視覚処理になるんですけど，絵の統合は因子分析の結果を見ると，視覚処理だけじゃなくて言語的な要素が強いので，この絵の統合は CHC の検査には入れてないんです。そういう大胆なことをやりました。

鈴木：アメリカ原版とは違う構成になる。

石隈：アメリカの原版とは違います。それがカウフマンのご理解を得てというよりも，もうカウフマンに「日本ではこうなんだけど，どう」という選択で。「それはもう大事なことで，面白い」と言っていただいて。日本の子どものための検査を作っているので。いつから Pearson 社が KABC-II のオーナーになったか覚えてないんですけど，Pearson はやっぱり原版に沿ってというのをすごく大事にしてる会社なので厳しいですが，その方針の意議はよく分かります。ただ WISC-Ⅲなどでの日本版では日本の事情をかなり丁寧に説明して，原則は原版に沿いながら，日本のことも分かってもらえています。それは日本文化科学社を通して日本版のウェクスラー式検査の信頼があるからです。K-ABC のときの American guidance service は，カウフマンと私の直通があったので，大変楽でしたね。

鈴木：他に内容を見ていて不思議に思ったのが，日本人で天井効果が出て難易度を高めた課題が，K-ABC では模様の構成と視覚類推，位置探し，KABC-II では，絵の統合，近道探し。日本人はこういう課題が得意な民族，特徴というのがすごい驚きでした。

石隈：あるんですよね。模様の構成って日本人ってほんとによくできるので，前川先生が，K-ABC のほうですけど，難しい問題をいくつかご自分で作られたんですよね。KABC-II のときもありました。同時処理的なものが日本人では天井効果が出たんですよ。これが私の博士論文と関係してて，日本人はアメリカ人と比べたら同時処理が優位であろうという仮説を立てたんです。でもアメリカの子どもたちと日本の子どもたち，両方取って比べたら，残念ながら有意差が出なかったのです。幸い IQ の得点も有意差はあまり出なかったので，アメリカ人にも日本人にも非

難されることなく博士論文を出すことができたんですけど。

一時期，日本人は知能が高いんじゃないかと言う人もいて，私も同時処理が強いと思ったんです。逆に数唱，縦次処理はアメリカ人のほうが，成績がいいんです。だから日本人は同時処理とか視覚的処理が強いのかなと思ったんですけど，私の博士論文では出なかったんです。

鈴木：日本の文化のどんなところに強さが生きてるか，普段接しているものが強さを伸ばしてるのかとか，想像すると面白いと思います。

安齊：日本人は絵を描くのが大好きで，江戸時代に外人が来たときにみんな絵を描いてたりとか，旅行に行くと写真を撮るのが大好きだとか，そういう視覚的なものが日本人は好きなのと関係あるんですかね。

石隈：面白いですよね。あるかもしれないですよね。K-ABC の中で“Faces and Places”という削った下位検査があるんです。これは face だから有名な顔と，Place，有名な場所を見せて，習得度で知識を問う検査なんです。WISC は知識という検査があって，社会とか理科の問題が載ってますよね。だけど K-ABC は，社会科的な知識ってあまりないんですよ。なぜかというと“Faces and Places”という社会的な知識の下位検査を，日本は K-ABC に使わなかったからです。使おうとしたんです。途中までやったんです。向こうだとディズニーランドとかマイク・タイソンとか，有名な人とか場所とかが出てきて，日本だと有名なスポーツ選手は長嶋かなとか，王貞治かなとかね，結構あるじゃないですか。（下位検査を削除した）理由は 2 つあるんですけど，1 つの単純な理由は，アメリカは教育に使う場合は著作権フリーになることが多いんですよ。だからマイク・タイソンのカシアス・クレイ，確か K-ABC の “Faces and Places”にあったんですけど，著作権フリーになったんじゃないかなと推測します。でも日本にはそんな文化はなかったので，王貞治さんの写真を使わせてもらうと，ロイヤリティーが発生する，教育用の検査としてはそぐわないというのが 1 つ。もっと面白い理由としては，日本でちょうどいいのがなかなかない。例えば向こうでは，女性では王女様とかヘレン・ケラーとか，活躍した人いるじゃないですか。日本では明治時代で活躍した女性は誰かっていうと，樋口一葉かなとか。

鈴木：顔を見ても分からないですね。

石隈：分かんないでしょう。今だったら小池百合子さんかなとか。なぜかって考えたときに，日本の歴史ってやっぱり出来事なんですよ。何とか王朝とか何とか時代とか。エピソード。こういうことが起きたから時代が動いた，なんですよ，日本人的には。アメリカは人物に興味がある。リンカーンが南北戦争で勝って奴隷を解放したって，べつにリンカーン 1 人が奴隷を解放したわけじゃなくて，奴隷解放までにすごく歴史があったり，リンカーンは北のほうの工業地帯を応援したりと，いろいろな複雑な理由があって奴隷解放が成り立つわけですけど，アメリカ人はやっぱり英雄を大事にするから，誰がこれをやったとなるのではないかなと思います。日本では何が起きたかが主なので，この“Faces and Places”の”faces”を見つけるのが大変だったのです。

私は，アメリカの短大のときの授業で一番大変だったのはアメリカンヒストリーで，大統領の名前を全部覚えなきゃいけない。アメリカ人にとっては当たり前なんですよ。でも日本の高校生・大学生で総理大臣全部覚えなくても大丈夫でしょう。アメリカは全部。日本は人じゃないんですね。

安齊：日本は，天保の改革とか，明治維新とか。

石隈：そうそう，時代ですよね。だから知能検査を作ってて面白いのが，やはり文化ですよね。

日本の子どもたちにふさわしい検査を作りましょうと。本当は日本版があればそれでいいんですけど，アメリカ版のいい検査があったので，たまたまそれをベースにさせてもらう。そうすると，そういう文化的な，これは論文には書けないよねという話は，検査の編集委員会に出ると出て来る。

日本版 K-ABC 出版

安齊：石隈先生が，日本に帰られた後のお話をうかがってよいですか。

石隈：日本に帰って最初に関わった大仕事が，1993 年の日本版 K-ABC の開発です。日本文化科学社は K-ABC の日本版を出さないことになったので，出版社を探しました。当時子ども向けの絵本を作ってた，丸善メイツという会社が，松原先生が懇意にされていた関係で引き受けてくださり日の目を見たんです。つまり日本版 K-ABC は日本文化科学社のご支援のおかげで基礎研究ができて，丸善メイツのおかげで製品化されたのです。ただ知能検査を作るのは，本当に大変でした。日本文化科学社は検査開発の高いノウハウがありますし，検査に強い社員の方々もいらっしゃるんですけど，丸善メイツはそういう方がいらっしゃらなかったので，担当の方 2 人ぐらいが本当に検査のことも勉強しながらやりましたよ。本当にそのおかげで，K-ABC 日本版ができました。

「出版社が心理検査の開発と研究の全部を行うのは中立的ではない。心理検査の発展は研究者と出版社の協働作業だ」という藤田先生のお考えにより，藤田先生と松原先生のリーダーシップで，日本 K-ABC アセスメント研究会というのを作るんです。今は日本 K-ABC アセスメント学会です。今，会員数は 600 とか 700 ですけど，全国の心理職とか特別支援の先生が来て K-ABC, KABC-II を勉強して，結果を現場に生かすという，しかも「K-ABC アセスメント研究」という学術誌も出してというのが，K-ABC がその後発展した一つの理由です。丸善は出版社として，現場は現場として，ちゃんと自分たちがニュートラルにやる。K-ABC の事例発表会というのは，K-ABC だけじゃなくて WISC ももちろんやるし，ビネーとか DN-CAS とか，知能アセスメントの勉強会になってます。

私は当時の仕事が，筑波大学の保健管理センターの学生相談室のカウンセリングでした。松原先生が私の上司です。学生相談を担当しながらアセスメント，子どもたちの援助と学生の援助とでバランスを取って。K-ABC を作って，その後幸運にも WISC-Ⅲの開発に声をかけてもらったので，心理検査の出版と研究を続けてきました。今は検査を作るっていうのは社会貢献と見ていただけるんだけど，当時は，検査を作ることはあまり大学の研究者としては評価されてなかったように思います。

筑波大学で継承される知能検査開発の仕事

安齊：先生，質問してもいいですか。筑波大って田中寛一先生がいたから，東京教育大学があったから，知能検査の研究者が多いのでしょうか。確かに私が学生のときも知能検査の研究をしている先生はたくさんいたように思うんですけれども，それは田中イズムというか，田中寛一ルーツなんでしょうか。

石隈：私が知っている範囲でお答えすると，歴史的にはそのルーツを守ってるのは，田中研究所で今のビネーの開発者の大川一郎先生だと思います。大川先生は，その前の杉原一昭先生という，

発達心理学の歴史を継いでおられます。田中先生がどういう影響を与えてたかは分からないんですけど，筑波大学の中の特別支援教育の方は，特別支援が必要な人に検査をするという流れがあります。というのは，松原達哉先生は筑波大学のときに，まず心身障害のほうの助手だったんです。それから心理に来られたので，実は松原先生も特別支援教育の筑波大学の流れがあるし，藤田先生，前川先生も特別支援教育の分野ですよね。筑波の心障系の人たちが心理検査を頑張ったという川の流れはあると思います。

一方，WISC に関しては東京学芸大の上野一彦先生の存在が大きく，知的障害とか学習障害を支援する検査の流れがあり，藤田先生，前川先生の筑波の障害児教育グループの流れと合流します。それと田中先生の検査の流れがあって，松原先生は両方に関わっておられたように思います。私はそういう流れの中で，検査を開発している先生方がいらっしゃる筑波大学にたまたま就職したという，すごい運命だと思います。

安齊：石隈先生は，心理学に愛されてるのだと思います。

石隈：これも偶然なんです。サンディエゴ州立大学で，ハーフタイムで小学校のスクールサイコロジスト・インターンをしていた頃，テニュアトラックのアシスタントプロフェッサー2 人の公募がありました。私は筑波大学のことを知る前に，手を挙げて公募審査のプロセスに乗ってたんです。審査の最終段階の手前の大学院生への模擬授業の評価が終わり，最終段階の学部長面接もパスしてたんです。2 人の候補の 1 人になってたんです。まだ辞令はもらってませんでしたけど。そこで松原先生から，筑波大学で保健管理センターが教員を公募してるよって言われて，どうしようかなと思ったときに，日本に帰りたいなという気持ちがあったので。でも松原先生が，「これ公募だから決まってないよ。通るかどうか分かんないよ。それから日本は二股駄目だよ」とかって言われて，そうだよねと思って。

まあ日本に帰りたい一つの理由は，私はアメリカで子どものカウンセリングをやっていて，多文化というのは私の専門領域の一つなんですけど，やっぱり限界があるんですよ，アメリカの子どもの気持ちとか保護者の気持ちの理解っていうのが。だから日本の親だったら，もっと理解できるかなというふうに思ったのと，家族の希望もありました。それですごい賭けですよね。筑波大学公募に出したわけですよ。

ただうれしかったのは，アメリカの学部長面接の後に，学部長にこういう話があり日本に帰りたいからアプリケーションを出すと言ったら，彼女がやっぱりすごいなというか，うれしいなというのは，2 つあるポストの 1 つは埋めると。もう 1 つは埋めないから，筑波大学が通らなかったら来いと言われたんです。これもラッキーな話です。

日本のスクールカウンセラーに望まれる姿勢

小泉：スクールカウンセラーをやってたことがあるんですけど，1 年間ぐらい関係作ってという感じです。アメリカはどうなんですか。日本は人物を見て相談に来るのかなと。

石隈：アメリカは制度がはっきりしていて，基本的には中高は主にスクールカウンセラーで，小中がスクールサイコロジストで，クリニカルサイコロジストはカウンセリングセンター，外にいる。スクールカウンセラーは大体ガイダンス的なこととかキャリアカウンセリングで，中学，高校生で単位を選んだり進路のことを考えたりするので，年に 1～2 回は会いますよね。で，困ったときに来るだけでなく，定期的に来るシステムができてる。スクールサイコロジストは，主に

小学校で発達とか障害のある人たちの知能検査とかアセスメントをやるので，これは相談者本人の意思というよりも先生の勧めです。だから学校と関係を作るまで相談者を待っているというのは，アメリカは多分少ないと思います。だから日本の方が大変だと思う。

信頼関係に関して，検査のときにいつも思うんですけど，2 つパイプがあって。1 つはこのカウンセラーだから，あるいはこのテスターだからテストを受ける，カウンセリングを受けるっていう信頼と，テストを受けることは自分にとって悪くない，メリットになる，テストを受けることは耐えられる，あるいはカウンセリングを受けることは自分にとってプラスになるかもしれないっていう信頼。人のほうの信頼関係と，作業のほうの信頼関係と，二重だと思うんですね。日本ではまだカウンセリングというのは作業のほうの信頼関係が制度としてあまりないから，逆にこの人だったらということに比重が行かざるを得ないですよね。今だと，スクールカウンセラーだったら行ってもいいかなという方は多いと思うんです。だから人気のあるスクールカウンセラーなんか，もう予約がいっぱいです。テストの場合はもう短期決戦なんですよ。ずっと関係をつけてテストをやるっていうんじゃなくて，1回目いろいろお話をしたり，遊んだりして，「あなたの今勉強で苦戦してることも分かったし，友だち関係も損することあるよね，あなたの成長するのを応援したい。お母さんもそう思ってるし，先生もそう思ってるし，私も思うんだけど，どう。今度いろんな問題を解いたり，パズルやったりのようなことを先生と一緒にやらない」というので，1 回目で私っていう部分は（関係を）ちょっとつけておいて，後は，こういうことをやると私に得になるかもしれないという，作業の部分での納得。だからいわゆるカウンセリングでアイスブレークというのと，アセスメントのアイスブレークはちょっと違って，作業の納得の部分が結構大事です。私はいわゆるスクールカウンセラーが検査をやることには全く抵抗はなくて，その結果はもう丁寧に返して。

日本は，幸いスクールカウンセラーっていう名前でスタートしたんですけど，今，公認心理師が誕生します。心理職というのは，アセスメント，直接支援としてのカウンセリング，関係者支援・コンサルテーション・コラボレーション，それから心の教育である心理教育，4 本柱なので。そうするとアセスメントはすごく大事になっています。スクールカウンセラーが，「いや，私カウンセラーだから検査はしません」ということには，私はならないと思ってます。

安齊：私はスクールカウンセラーを 8 年ぐらいやってたんですけど，小学校に行って，問題の子がいて，私は知能検査をやることができるし，グッズも借りてきて学校でやりましょうかって言うと，校長先生が許可しない。教育委員会に，こういうのはやらないでくださいって会議で言われて，できないとか。

石隈：それは多分スクールカウンセラーという定義を狭くしていることと，信頼関係が検査によって壊れるんじゃないかという誤解だと思いますね。私はアメリカで，検査を頼まれてやった子どものカウンセリングももちろんやりましたし，カウンセリングしている子どもの検査もやりました。あなたの味方のために，私の立場を活用しますよということです。だから日本のスクールカウンセラーが知能検査をしないというのは，もったいないと思います。

私は，いわゆる臨床心理面接，丁寧に人間関係作りながら応援するという風習を，スクールカウンセラーの方がゲットしてこられたので，それはリスペクトしたいんですけど。次の時代はそうじゃなくて，スクールカウンセラーのことを学校臨床心理士って呼んでるじゃないですか。だから心理職なんですよ，求められてるのは。心理的な援助なので，アセスメントもカウンセリン

グも両方やるよっていうのが，私にとっては自然なんですね。その辺がこれから伝わっていけばいい。

もう 1 つ言うと，日本の職業って多様でしょう。多様性は，職業の成熟度も多様なんです。大学も含めて教員とか，弁護士とか，医者とか，これらは成熟化した職業なんです。スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーは成熟度が非常に低い。新人，発展途上なんですよ。業務を見直して，どうやったら良い教員の仕事ができるかを質的に絞ろうというのが，チーム学校の中での文科省が言ってる教員の仕事の業務改善。先生方に力をもっと発揮してもらう。先生方が教育相談をやったり，特別支援をやったりというのは，私は日本のとってもいいシステムだと思うんで，それを減らすという意味じゃなくて。スクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカーがもっと学校に行くことで，先生方が自分の業務を見直し協働するチャンスだと思ってるんです。成熟した教師の仕事は見直し，持続可能にする。スクールカウンセラーとかソーシャルワーカーは，まだデビューしたてなんだから広げていいんです。それを面接に狭めてると，発展を留めることになります。

私の個人的な意見ですけど，公認心理師法を大事にして，アセスメントできますよ，カウンセリングできますよ，コンサルテーションもちろんできますよ，心の健康教育は喜んでやりますよ，ですよね。発展途上の心理職，スクールカウンセラーの仕事の領域はふくらますべきなんですよ。それで役に立つなあという社会との信頼関係ができるといいんです。今，発達障害のことがこれだけ注目されてるのに，小学校に行って心理検査できるカウンセラーってありがたいじゃないですか。ただ場所は学校に限らず発達センターなど工夫することができます。アメリカでも検査をする場所はちょっと気を使うことがありました。

鈴木：学校で一番役に立つ心理検査は，やっぱり知能検査だと思います。その子の学習をどうやって支援したらいいかっていう目安を手に入れられる。

石隈：そうなんです。あと日本の課題は，心理職はそういうふうにやるのが遅かったから，逆に現場は待てなくて特別支援学校の先生とか，一生懸命 K-ABC とか WISC を勉強して本当にスキルフルにやってらっしゃるんですよ。だから今後は心理職ができたときに，心理検査ができる心理職と，心理検査ができる特別支援とか学校の先生とがうまく協力し合う。公認心理師は幸い名称独占で業務独占じゃないので，検査は全部心理職ですよっていうのではなくて，トレーニングを受けてできる人が，今やればいいかなと思う。K-ABC も WISC も勉強したって，両方勉強してる人が多いので，そういう人のスキルは大事にしたいなと思いますよね。

安齊：これから先生としては，やっぱり検査ができる心理職が発展していくという考えでしょうか。

石隈：というのが私の望みですけど，検査「も」できる。つまり検査というのは，されど検査，たかがツールで，ツールを使う人が心理職として成長しないと使えないのが一つと，検査ってある場面の構造化された観察でしかないので，子どもの日頃の勉強する姿とか，遊ぶ姿とかあるいは面談中の様子とか，それから去年の担任の聞き取りとかっていう，総合的データの中で検査結果を使わないと，検査結果は生きてこないっていうのは，カウフマンから私が学んだことです。彼はインテリジェント・テスティング，賢いアセスメントって言うんですけど，検査者が賢くならなければ駄目だと思ってるので。検査は使えるけども，それは必要十分条件の 1 個でしかない。だから子どもが勉強したり遊んでるのを見て，子どもとちゃんと話ができて，その子の特性とか

苦戦してることを理解できることが大事だと思います。子どもの援助に結びつけるために，検査という道具を上手に使うという方向で，子どもの理解が統合されるといいかなと思いますね。

だから私は，スクールカウンセラーで頑張ってる人には，皆さんの面談とか信頼関係を作るスキルは，検査をやるスキルに役立ちますよと，結果の解釈にも役立ちますよ，だから検査を情報の一つとして使いましょうって伝えている。検査も出来る，つまりアセスメントができる心理職で，アセスメントの一つが発達知能検査というのが望ましい。

検査の欠点について言うと，検査を過大評価する人がいて，これだから知能が低いとか，こうだからっていうワンパターンで決めて，ほかの情報を使わないで，検査をあまりにも過大視するのはよくないかな。というのと，やっぱり知能に関して，まだまだ世の中わかってなくて，IQが 180 とか 200 とかいう話も出る。

安齊：そんな上は出ないですよね。

石隈：ねえ。もう WISC，K-ABC では出ないですし，ビネーでも実際そういうのは非現実的ですよね。

<u>知能観，発達観</u>

鈴木：先生の知能観を教えてください。

石隈：知能に限りませんけど，生まれつきの遺伝と環境の相互作用によって発達するものという捉え方を私も大事にしています。今，遺伝のことも言われてるし，環境のことも言われてるし。遺伝と環境と，あと本人の学習です。やっぱり知能というのも，本人が学習して獲得したものなので，生まれつきのものもあるし，環境も本人の働きの一部ではあるんですけど，やっぱり本人が獲得したものを，そのときたまたま獲得しているものを測るのが知能検査だと思います。だから知能は発達するし，変わるもんだと思います。ある意味では，よく心理学でいう特性と状態という言葉があって，特性不安って不安になりやすさと，状態で不安の度合いが強いって言い方をしますけど，知能検査の結果は，その方の割と長続きする特性的な要素が強いですが，今そういう知能なんだよねっていう状態的なものもちょっぴりあるかなと。

よくいわれるのは，虐待を受けたお子さんというのは知能の発達はゆっくりですけど，より健全な環境だと知能が伸びるっていうのは，その子の状態がよくなるわけですよね。精神的な病があって薬を日常的に長く飲んでいると，知的な活動が非活性化する，で知能検査の結果が下がるというのも，状態ですよね。発達障害のある子どもが学習面ですごく苦労して，うまくいかない場合には，小学校のときは知的な障害を伴わない発達障害であっても，中学生，高校生になると全体的に知的な発達がやや伸び悩むということは，これは現実にはありますね。そういった意味では知能は発達し，変わるもので，その結果，いろいろ教え方とか指導案を作るという意味での特性的なものと，今の発達の状態を把握するということと両方あるかな。

もう一つ。知能を個人だけから見ていいかなという疑問もあります。ウェクスラーの知能の定義は「目的をもって行動し，合理的に思考し，自らの環境に効果的に対処するための個人の能力」です。例えば保護者が言語の障害のある子どもに話しかけると，保護者に笑顔を見せます。すると保護者は子どもにもっと話しかけるようになります。子どもの環境用の対処は効果的ですし，子どもが合理的に保護者（環境）との相互作用を理解して笑顔を見せているとすると，その行為は子どもの知能の働きだと言えます。もちろん子どもの知能の働きには，環境の方にも子どもに

呼応して変わるための思考や行動，つまり知能が求められます。子どもの知的働きと環境の知的働きの相互作用で見たいと思います。これが私の知能観です。

そういう意味で言うと，知能検査で測っているのは本当にごく一部です。子どもの認知能力の発達状況や特性を理解して，子どもの学習や環境での活動を援助できるようにすることをめざしています。つまり知能検査は，子どもを変えるためのものでなく，援助方法など環境が変わるために行うのだと思います。知能検査に関しては CHC 理論など検査の理論はかなり発達してきました。いい理論できちんと WISC-IV や KABC-II などの検査を作れば援助に役に立つものはできると思っていますが，それには限界があります。検査の実施っていい加減な実施もあるし，結果の解釈が乏しい場合もあるので。これはいい検査の実施をして，いい結果の解釈をした場合に限り，人が学びやすい，生きていきやすい環境をつくることができると思います。そうじゃない場合は人を傷つけることも誤解することもあります。これが私の知能検査観です。

知能検査の将来

鈴木：この先，知能検査はどうなると思いますか。他の開発者からは，標準化協力者を探すのが大変だから，知能検査，個別式の作成が難しくなるのではという話が出ました。知能検査はどのような方向に発展していくのでしょうか。

石隈：検査の作成の課題と，検査そのものをどう使うかという課題になるんですけど，検査作成の課題は以前よりも難しくなりましたね。前は，校長先生が OK，じゃ先生たちも OK みたいな。K-ABC の頃はそうでしたね。KABC-II になると本人の承諾，もしくは保護者の承諾が必要ですよね，被検者になってもらうのはね。でもこれは心理学の実験とか考えたら，ある意味で言えば普通のことなので，だから被検者が集まらないということはなくて。検査の意義を社会でちゃんと認めていただいて，実験のときの礼儀を尽くせば，協力してくださる方はいらっしゃる。そういう人がいなくなったら，心理学の実験そのものが，もう誰も手伝ってくれなくなる。私は，そこは希望があるんです。サンプルを集めるのは難しくなるけども，できなくなるっていうことはないだろうと思っています。これが 1 つ。

それと，検査をどう使うかということを，検査だけじゃなくアセスメント能力も含めて大学院レベルの教育とか，心理職の教育の中にやっぱりきちんと盛り込んでいく。あるいは学校の先生方で心理検査を勉強した人を尊重する中で，使う人がどう信頼関係を維持できるか。アメリカは，検査はやっぱり差別の道具だという意見があったところで，RTI の基準で，検査を使わなくても LD の判断ができるよねってことになったので，やや下火なんですけど，でも現場で検査を使うサイコロジストはアメリカでも多い。やはり発達の大変さとか生きづらさっていうのを支援する，知能検査の価値は上がることはあっても，下がることはないだろうと私は思ってます。

ただ今回のようなインタビューも含めて，検査ってこういうもんですよということを，社会の人にできる限り伝えていかないと，何か検査は差別の道具だとか，被検者が見つからないよねっていう，何か噂というか，限られた情報が流れるとしんどいかな。

3 つ目に，検査のリーダーは次の世代にバトンを渡す時期になっています。私はリーダー世代と次の世代の橋渡し役ができればいいなと願っています。まず大六一志先生，松田修先生，山中克夫先生，小野純平，服部環先生。その上の世代が松原先生，藤田先生，上野先生，前川久男先生，石隈と。続く世代が，「心理検査作るって魅力だよね」とか，「知能の検査研究してみよう」

とかという。やっぱり検査作るのはとても大変なので，そういう人を育てていくというのはわれわれのミッションというか，課題かなと思ってます。

おわりに

本研究では，「日本版 K-ABC」（1993），「日本版 KABC-II」（2013）の改訂の中核となった石隈利紀へのインビューを報告した。インタビューでは，アメリカでの学校心理学の学びと実践，カウフマンの教え，日本版改訂作業の工程や現代的課題が語られた。

一般に，海外原版の知能検査を改訂する際，国際比較を可能とするため改変が避けられる。だが，日本版 K-ABC では日本人用に高難易度の項目が足され，日本版 KABC-II では CHC 理論の解釈法追加と習得尺度の継続的採用が行われた。このように大幅な改変が実現した条件に，日本版 KABC-II 開発者の服部は出版社との契約で改変の制限がなかったことをあげた（鈴木・安齊，2020）。さらに今回，石隈は「私はカウフマン先生と直通でやりとりできるので，K-ABC の場合も，KABC-II でも，柔軟性が結構ありましたね」と語った。この発言は，『日本版 KABC-II マニュアル』（Kaufman & Kaufman, 2013 日本版 KABC-II 制作委員会訳編）にある「日本版ＫＡＢＣ－Ⅱについては，開発の過程において Kaufman 夫妻との情報交換や助言を得て，作成している」を裏付けるものである。日本版の改変は，カウフマンと直接連絡が可能な石隈の存在によって実現した部分が大きいといえる。

しかしそもそも，知能検査は改変するものだろうか。開発者本人は，検査の等価性についてどう考えているのだろうか。石隈は，カウフマンが K-ABC を開発した背景について，アメリカの事情を考慮し特定の人種や言語に有利とならない検査を目指していたと語った。この言葉からは，カウフマンが世界中の子どもに平等で，共通に使用できるカルチャーフリーの知能検査を志向したことが読み取れる。一方で，日本独自の改変は，K-ABC が人類共通の尺度とならない道を選択したことを示す。改変の交渉について石隈は「カウフマンに『日本ではこうなんだけど，どう』という選択で。『それはもう大事なことで，面白い』と言っていただいて。日本の子どものための検査を作っているので」と短く述べた。この応答からは，カウフマンが，K-ABC は援助を必要とする目の前の子どものためにあると考え改変を承諾した様子がうかがえる。カウフマンからの学びの 1 つとして，石隈は「検査は子どもを援助する一つの手段に過ぎない」（石隈，2021）をあげている。この言葉と同様に，日本での改変承諾についても，支援対象である子どもが中心という基軸をカウフマンが示したと想像される。

平等を目指しながら日本での改変を許した K-ABC は，言い換えれば，人種や言語など子どもの多様性については平等で，子どもが育つ文化に配慮した調整は許される，子ども本位の検査と表現できる。このような意味で，文化への柔軟性を持つことが K-ABC の大きな特徴といえるのではないか。

謝辞

石隈利紀先生には，長時間のインタビューにご協力をいただき，インタビューの文言を細やかにご確認いただいた。先生のウィットに富んだお話しからは，臨床・研究に対する姿勢も含めて多くのことを学ばせていただいた。心より感謝を表します。

文献

Binet, A., & Simon, T. (1905). Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectual des anormaux. L'annee psychologique, *11*, 191-244.

石隈 利紀(2021). カウフマン博士夫妻と私～賢いアセスメントからの学び～, K-ABC アセスメント研究, *23*, 1-15

Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (1983). *Kaufman Assessment Battery for Children.* Circle Pines, MN: American Guidance Service.

Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (1983). *Kaufman Assessment Battery for Children.*（松原達哉・藤田 和弘・前川 久男・石隈 利紀（共著）(1993). K・ABC 心理・教育アセスメントバッテリー：実施・採点マニュアル　丸善メイツ）

Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (2004). *Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition.* Circle Pines, MN: American Guidance Service.

Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (2004). *Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition.*（日本版ＫＡＢＣ－Ⅱ制作委員会（訳編）(2013).日本版ＫＡＢＣ－Ⅱマニュアル　丸善出版）

日本文化科学社(2021). 沿革<https://www.nichibun.co.jp/company/history.html>(2021 年 9 月 2 日）

大泉 溥(編)(2003). 日本心理学者事典 クレス出版

鈴木 朋子(2018). 田中教育研究所における知能検査の継承：大川一郎・中村淳子へのインタビューから　横浜国立大学教育学部紀要, I 教育科学, *1*, 95-112.

Suzuki, T. (2021). History of Psychological Testing from the Perspective of Test Developers in Japan. *Japanese Psychological Research,* Advance online publication. https://doi.org/10.1111/jpr.12361

鈴木 朋子・小泉 晋一(2019). 日本におけるウェクスラー知能検査(WAIS-Ⅲ)の改訂:山中克夫へのインタビューから　横浜国立大学教育学部紀要. I 教育科学, *2*, 95-114.

鈴木 朋子・鈴木 聡志・安齊 順子(2016). ウェクスラー式知能検査本邦導入の背景：品川不二郎・孝子へのインタビューから 横浜国立大学教育人間科部紀要, II 人文科学, *18*, 1-18.

鈴木 朋子・安齊 順子(2020). 日本版 KABC-II 開発における統計作業の実際: 服部環へのインタビューから 横浜国立大学教育学部紀要, I 教育科学, *3,* 93-111.

Wechsler, D. (1939). *The Measurement of Adult Intelligence.* Baltimore: Williams & Witkins.